

メッセージアウトライン ヨシュア記8:1～29 「神の民の戦い」

「アイ」の町はエリコの西北西約18キロメートルの地にあった。神の約束の地カナンに入り、エリコを征服したイスラエルは意気揚々とアイの町の攻略にかかった。アイは小さな町であったのでおよそ三千人が戦いに上ったが、なんとイスラエル軍は打ち負かされてそこから逃走したのであった。

イスラエルの敗北の原因はユダ部族のアカンという男がエリコ攻略の時、「聖絶」すなわち神のために滅ぼしさをさげるべきものであった物の中から銀や金、衣服を取って自分のものとしたからであった。主はそのことを指導者ヨシュアに示され、くじを引くという方法によってアカンを選びだされた。アカンは罪を認め、民は彼を石打にし、それによって主はようやくイスラエルに対する燃える怒りを収められた。これが7章の出来事であった。このようにしてアカンのさばきが済んで、民がきよめられて、仕切り直しである。

[1]「主はヨシュアに言われた。『恐れてはならない。おののいてはならない。戦う民をすべて率い、立ってアイに攻め上れ。わたしはアイの王と、その民、その町、その地をあなたの手で与えた。』」

主は再びヨシュアに「アイに攻め上れ」と命じられる。そしてまだ自信を失っていたであろうヨシュアに向かって「恐れてはならない。おののいてはならない」と励まされる。しかし、これは単なる励ましのことばではなく、出エジプトの指導者モーセと共におられた主がアイの攻略においてもモーセの後継者ヨシュアと共におられるということの再確認である。主は決してヨシュアを見放してはおられないのである。さらに主は「戦う民をすべて率いて…」と言われる。前回は三千名であったので、これは大きな違いである。民26:2でカナンを前にして主がモーセに命じて二十歳以上で軍務につくことのできる者の人口調査をさせているが、その結果は民26:51によると六十万一千七百三十人であった。年配の者や交代要員、居留地を守る者を差し引いても三分の一の二十万人は戦いに出て行くことができたであろう。これは数を頼みとして人海戦術で戦うためではなく、すべての神の民が神の戦いに参加するためであった。ある者は戦い、ある者は「自分は行きたくない。関係ない」ではすまないものである。たとえ最前線には出なくても背後にあって常に守りを固め、応援体制を整え、いつでも対応できるように準備をしていなければならない。そのようにして戦うことによって「わたしはアイの王と、その民、その町、その地をあなたの手で与えた」との主のみことばが実現するのである。

[2]『あなたがエリコとその王にしたとおりに、アイの王にもせよ。その分捕り物と家畜だけは、あなたがたの戦利品としてよい。あなたは町の裏手に伏兵を置け。』

エリコ攻略の時と違うことはエリコの時はずべて聖絶しなければならなかったが、ここでは「分捕り物と家畜だけは、あなたがたの戦利品としてよい」ということであった。そして主は「町の裏手に伏兵を置け」と命じられる。主はいつも超自然的な方法で敵を打ち破られるのではない。ここでは敵に対して作戦を用いて戦うというきわめて人間的な方法が用いられている。

[3-9] そこでヨシュアは戦う民すべてとともに立ち上がり、その中から三万人の勇士を選んで彼らを伏兵としてアイの町の裏手に送り出した。(3-4) そこは9節にあるようにベテルとアイの間でアイの西側であった。ベテルはアイの西で数キロメートルしか離れていなかった。

ヨシュアは彼らに作戦を教える。まずヨシュアに率いられた兵士たちがアイの町に近づく。するとアイの住民は彼らを追って町から出て来る。するとイスラエル軍は逃げる。アイの住民は彼らを追って町から出て来る。そのようにしてアイの住民は町からおびき出される。その時、町の西側に隠れていたイスラエルの兵士たちは立ち上がって町を攻撃し、占領し、町に火を放つ。(5-8)

これがヨシュアが彼らに授けた作戦であった。それで三万人の勇士たちは夜のうちに約二十キロメートルの道のりを歩いてベテルの町の西側に移動した。(9)

[10-11] 翌朝早く、ヨシュアはイスラエルの長老たちとともに全軍を率いてアイに上って行った。そして彼らは町の北側に陣を敷いた。彼らと町の間は谷によって隔てられていた。

[12] この時、ヨシュアは兵士たちの中からさらに約五千人を取り、やはり町の西側、ベテルとアイの間に伏兵として配置した。それで合計三万五千人がアイの町の西側で鳴りを潜めていたわけである。

[13]「兵は町の北側に全陣営を置き、町の西側にはその後陣を置いた。ヨシュアはその夜、谷の中に下って行った」

いよいよ敵と戦う前の晩、指導者のヨシュア自身、町に一番近い谷に身を潜めて敵の様子をうかがいながら夜を過ごしたのである。

[14] 翌朝、アイの王は町の北側に陣を敷いているイスラエル軍に気づいた。第一回目のイスラエルとの戦いの勝利に酔っていたアイの王は、すぐに何の用心もせずイスラエルと戦うために軍勢を率いて町から出て来た。「アラバの手前の決めておいた場所」とはアイの町の人々をおびき寄せるために決めておいた場所のことであろう。「アラバ」とは草原、荒地、峡谷という意味。彼らは町の後ろに伏兵がいることに気づいていない。

[15]「ヨシュアと全イスラエルは彼らの前で打たれるふりをし、荒野への道を逃げた」

これはすでに決めておいた作戦である。

[16-17]「アイにいた兵はみな彼らの後を追うために呼び集められ、ヨシュアを追撃

し、町から誘い出された。そのため、イスラエルの後を追って出なかった者は、アイとベテルに一人もいなかった。彼らは町を開け放しのまま捨てておいて、イスラエルを追撃した」

ベテルはアイのすぐ近くの町であったのでベテルの人々もアイを助けるために来ていたと思われる。そのようにして彼らはイスラエルの後を追った。

[18]「主はヨシュアに告げられた。『あなたの手にある投げ槍をアイの方に伸ばせ。わたしがアイをあなたの手に移すから。』ヨシュアは手にある投げ槍を町の方に伸ばした」

ヨシュアが投げ槍をアイの方に差し伸ばすと伏兵が攻撃にかかるようにとの打ち合わせがヨシュアとイスラエル軍との間に決められていたのであろう。そして最善のタイミングで主がこの時、ヨシュアに声をかけられたのである。ヨシュアが槍を差し伸ばした合図は次から次へと伝達されていったことであらう。

[19-25] 町の西側に隠れていた三万五千人の伏兵はいっせいに立ち上がって門が明け放されていた町に入り込み、攻め取ってただちに町に火を放った。(19)

火はまたたく間に町に燃え広がり、イスラエルを追っていたアイの人々がうしろを振り返った時には町の煙が天に立ち上っていた。彼らはイスラエルのわなにかけられたことを知って狼狽したであらう。もう彼らは前にもうしろにも逃げるができなくなった。しかも逃げていたイスラエルの民がアイの町が攻め取られたのを知って反転攻撃してきたのである。その結果、町から出て来た者は生き残った者も、逃れた者も一人も残されないまでに徹底的に打ち破られてしまった。(20-22)

しかし、アイの王は生け捕りにして、ヨシュアのもとに連れられて来た。(23)

町に残っていた者も剣の刃で打たれ、このようにしてアイのすべての住民一万二千人がイスラエルの前に倒されたのであった。(24-25)

[26]「ヨシュアはアイの住民をことごとく聖絶するまで、投げ槍を差し出した手をもとに戻さなかった」これはアマレク人との戦いにおけるモーセの祈りの姿勢を思い出させる。→出17:11-12

[27-29]「イスラエルは主がヨシュアに命じられたことばのとおり、その町の家畜と分捕り物だけを自分たちの戦利品とした。ヨシュアはアイを焼き、永久に荒れ果てた丘とした。今日もそうである。さらに、ヨシュアはアイの王を夕方まで木にかけてさらし、日の入るころ人々に命じた。それで彼らはその死体を木から降ろし、町の門の入口に投げ捨て、その上に大きな石塚を積み上げた。今日もそうである」

申命記21:22-23によれば、処刑され木にかけられた者は神にのろわれた者であると言われている。そして神にのろわれた者は翌日までそのままにしておくことは許されず、その日のうちに必ず埋葬しなければならなかった。それで日没の頃、アイの王も木から降ろされ町の門の入口に投げ捨てられ、その上に大きな石塚が積み上げられたのである。

焼かれて徹底的に破壊されたアイの廢墟とアイの王の死体の上に積み上げられた大きな石塚はイスラエルの神、主の守りと導き、あわれみによって決定的な勝利を得たしとなった。

現代の人々から見ると何と残酷な、そこまでやらなくてもよいのではないかとも思ふかもしれないが、しかしこれは主なる神が神の民イスラエルを用いてなされたカナンの地の民へのさばきなのである。主はイスラエル人の先祖アブラハムに言われた。
→創世記15:13~16

創16節では「そして、四代目の者たちがここに帰って来る。それは、アモリ人の咎が、その時まで満ちることがないからである」と主は言われた。アモリ人とはこの場合カナンの地の民の代表として名前があげられている。すなわちカナンの地の民の罪咎が増大して、もはやこれまでという時に主は出エジプト以来ご自分の民として育て導かれてきたイスラエルの民を通してさばきをなされたのである。

それでも、悔い改める機会を与えてもよかったのではないかという意見もあるであろう。しかし、カナンの地の民が悔い改める時間は十分あったのである。アブラハムの時代に主はカナンの地の代表的な罪咎に満ちた町ソドムとゴモラを天からの火をもって滅ぼされた。そこから逃れたのは、アブラハムの甥のロトと二人の娘だけであった。それもアブラハムのとりなしと主のあわれみによることであった。→創世記19章

ソドムとゴモラが主から受けた恐ろしいさばきをカナンの地の住民はみな知っていたはずである。聖書の記録から簡単な計算をすると、この時からイスラエルが出エジプトをしてカナンの地に入るまでの期間はおよそ661年となる。

- ①ソドムとゴモラの滅びの一年後にアブラハムの子イサクが生まれた。→1年(創17:17、21、18:10、14、21:2)
- ②イサクが60歳の時エサウとヤコブが生まれた。→60年(創25:26)
- ③ヤコブがエジプトに下った時は130歳であった。→130年(創47:9)
- ④イスラエルのエジプト滞在は430年であった。→430年(出12:40~41)
- ⑤イスラエルはシナイ半島の荒野を40年旅をした。→40年(申命記1:3、ヨシュア5:6)

合計は1年+60年+130年+430年+40年=661年

この間にカナンの地の民は偶像礼拝や不品行や姦淫やその他多くの恐ろしい罪咎を悔い改めることができたはずである。しかし、彼らはそうしなかった。それどころか罪に罪を重ね、満ちあふれるほどになっていたのである。それゆえに主は彼らをさばかれたのである。

これはノアが約百年かけて箱舟を作っていた時とよく似ている。その時代、地は暴虐で満ちており、人間の罪が猛威を振るっていた。(創6:11~12) ノアが神の命により箱舟を造っていた期間は警告の期間であり、神が忍耐して待っておられる

期間であった。(I ペテロ3:20) しかし誰も悔い改めて神に立ち返ろうとはしなかった。それゆえ、神に従うノアとその家族と選ばれた動物たちだけが箱舟に入り、大洪水から救われたのである。(創7章)

そしてこれらのことは21世紀に生きる私たちにとっても警告であることを覚えておかなければならない。

しかし、今日学ばなければならない大切な点は、すべての神の民、すべての信仰者はこの地上の人生において信仰の戦いに召されているということである。信仰生活は戦いである。

この世はイエス・キリストの救いを知らず、かえってサタンの支配下にあり、罪が猛威を振るっている。そのような中でヨシュアとイスラエルの民のようにしっかりと信仰に立って、神のみことばに従いつつ、互いに助け合い、励まし合って信仰の歩みを進めていかなければならない。

イスラエルは罪の問題を処理し、神のみことばに従って行動していった時に敵に勝利することができた。私たちも救い主イエス・キリストを信じて罪赦され、救われて神の子とされた者であるが、その後も神を悲しませ、罪を犯してしまう者である。今はアカンのような石打ちはないが、罪を告白し、きよめていただくということは必要である。→ I ヨハネ1:9

そのようにした後、私たちは大胆に神の恵みの御座に近づいて、とりなし、願い、祈りをし、私たちの直面するさまざまな信仰の戦いを戦い抜き、勝利を得ることができるのである。

→ヨシュア1:9、ローマ8:31